



Title	日本諸學振興第一回經濟學會
Author(s)	河野, 吉男
Citation	商業と經濟, 19(2), pp.217-220; 1939
Issue Date	1939-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/27123
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-14T21:59:39Z

日本諸學振興第一回經濟學會

河野吉男

日本諸學振興第一回經濟學會は、昨年十月六、七、八の

三日間を通じて文部省第一會議室に開催せられた。全國各

大學、高等、中等學校等よりの無慮六百名に近い参加者の

會同のもとに極めて盛大に行はれたのであつたが、研究發

表は午前の部と午後の部とに分れ、午前の部は大體二十五

分以内、午後の部は大體十五分以内となつて、前者は十七

名、後者は十六名と豫定せられてゐた。しかし午前、午後

の研究發表は必しも豫定せられた通りには行はれず、順序

の變更、午前の部と午後の部との入れ替へ等もあつたが、

主たる研究發表が午前に行はれた關係上、次に午前の部に

豫定せられたもののみについて、研究題目と氏名とを摘記

してみやう。

防共政策の基礎づけ

神戸商大教授

五百旗頭真治郎

我が國體と經濟學

京大教授

石川興二

日本貿易の伸展性に關する一研究

東京商大教授

猪谷善一

西洋經濟學に於ける反省

高岡高商教授

大熊信行

我が國體と經濟組織

立命館大學教授

太田義夫

徳川時代百姓一揆の繼起性

京大教授

黒正巖

日貨ソシアルダンピング論に現はれた白人本位の經濟理論

經濟論

高橋龜吉

國家と經濟

慶大教授

武村忠雄

日本經濟學の建設と日本精神

京大教授

谷口吉彦

世界經濟に於ける日本發展の基調

三菱經濟研究所常任理事

長岡徳治

國家主義と其經濟原理 早大教授 林 癸未夫
 制度派經濟學批判 關西學院大學教授 古 屋 美 貞
 統制經濟の精神 東大教授 本位田祥夫
 日本經濟史研究の發展 京大教授 本庄榮治郎
 經濟學の國民的性格 大阪商大教授 堀 經 夫
 日本財政學の可能と任務 九大教授 三田村一郎
 計畫經濟に見落されてゐる基本問題

國民精神文化研究所員 山 本 勝 市

勿論、研究發表の報告時間が最大限二十五分に限定せられてゐることは報告者の發表をして極めて局部的限定的のものたらしめた止むをえない事情がある點は、大いに考慮せらるべきことと思ふが、然し諸學振興の第一回經濟學會としては、現代の經濟學の基調が如何なる方向に進みつゝ、あるやを充分に觀取せしめ得るにたる意義ある大會たりし點に於て、特に注目せられてよいものであつた。

就中現下の事變下に於て、わが國民經濟に關する思想乃至機構が、未會有の變革を経験しつゝある際にかゝる大會が行はれたことは、「時局と學會」とが如何なる相關關係に

於て相連結し、如何なる程度に於て相互的影響を及しつゝあるや、を計るに足るバロメーターとして極めて興味深きものがあつた。午前、午後の熱烈なる研究發表について約一時間に亘つて質問應答のために貴重な時間がさかれ、これまた、豫想以上の白熱さを以て種々なる討論が行はれたのであつて、前後三日間を通じて各研究、質問應答を一貫せる第一回經濟學會の根本思潮が時局を背景とするに極めてふさはしき本質と内容とをもつたものであつたことも、この際特記されてよいものであつたと思ふ。

各研究者個々の研究内容についてはこの際一々摘記して紹介批評することを避けたいが、その中には、従來行はれてゐた研究の延長として行はれたものもあり、或はその著書として既に公にせられたものの繰りかへしもないではなかつたが、しかしその何れも、單に文字によつて傳へらるる以外に、直接本人によつて要約的にのべられた點に於て別個の感銘を受けたものも多かつたのである。

しかながら、われわれが、今回の經濟學會に於て、特に注目せらるべき事實として摘記したいことは、右にかゝけ

た研究題目によつてもしられる如く、日本經濟學建設への一般的・白熱的志向である。講演題目に於て明確にかゝる意圖を表示したのもあれば、そうでないものもあつたが、たとひ明示はしてゐなくても、その講演内容が多かれ少なかれ、かゝる志向への結びつけの意圖を以て話されたものが多数にのほつたのであつた。防共、國家、國體、國防、報德、日本精神等々と經濟學との結合の問題、これが今回の振興大會の主たる題目であり、その爲に學界が總動員された點は、誠に、劃期的のものとして注目せらるべき點であり、且又極めて有意義のものであつたと云へる。

しかしながら、國家、國體、報德、日本精神等々と經濟學との結びつけの問題は通俗的に考へらるる程簡單にして容易なる問題ではないのである。この點に關しては、若干の講演者も既に壇上から、日本經濟學の建設は單なる思ひつき乃至はお説教に止つてはならないと反省的の言辭を漏されたのに徴しても明かである。誠にしかりであつて、世上稍もすれば、單なる思ひつきか、出まかせかで日本經濟學の建設を云々しつゝあるものもないではない。もし徒ら

に時流に投じ世俗にこびるの餘りに經濟學の建設を擬裝するが如きことありとせんか、經濟學の建設は徒らに邪道に陥ることとなり、終局に於ては經濟學建設の無效と無益とを證明するに止るのみであらう。われわれは、單なる思ひつきとお説教と、出まかせと出鱈目とを避けんが爲には、最近に於ける學としての經濟學の建設が、果して如何なる基調より出發し、如何なる方面に於て樹立さるべきであるかを深思しなければならぬのである。しかし、これが日本精神より出發すべきものであり、その方向が凡そ日本的の限界に於てのみ樹立さるべきことが、その眞理性に於て明らかにせられた限りに於ては、その機構と體制とはあらゆる科學的の批判にたへ、あらゆる知性の喜んで受容する所となるであらう。われわれは徒らに感情と情緒とに酔ふの餘りに、似而非日本經濟學と、眞なる意味に於ての日本經濟學の建設とを混同するの錯覺に陥つてはならないのである。昨年迄西洋經濟學の指導概念を金科玉條とせる者が只思想的・投機的に、今年に至つて急に二宮尊徳、吉田松陰を振り廻すが如きは、もしこれが徒らに時流に投ぜんと

するの餘りに出でたものであるならば、かゝる者は單に似而非日本經濟學の建設をなしつゝあるものと稱してよく、眞なる意味に於て要請せられつゝある日本經濟學建設への冒瀆と稱してよいであらう。

われわれは昨年日本經濟學の澎湃たる思潮は、本邦經濟學界轉回の一轉機を劃するものであり、諸學振興學術大會に於ける第一回經濟學會は、これを明瞭に印象づけたるものとして、極めて有意義なりしことを想起すると共に、本年度は、昨年度に於て一齊に叫ばれたる日本經濟學の建設の要求が、一層具體化するの時期として、大いに注目せらるべき年なることを指摘するに止めておきたい。

(三九、一、二〇)